

生れ月と幼児の発達の個人差



勝 井 晃

はじめに

幼稚園や小学校低学年の子どもをもつ母親の口から「うちの子は三月生れだから損をしている。」とか、「早生れの子はどうしても遅れている。」とかいう声を聞くことが多い。またさいきんでは「何月生れは頭がいいそうです。」とか、「夏生れの子は冬生れの子より劣るそうです。」というようなことさえ耳にすることがある。

たしかに親にとっては、自分の子が同年令のよその子と比較して、身体や知能に多少なりとも遅れが認められるとき、非常に気になるものであるし、またその遅れを何らかの原因に結びつけて弁解したり納得したいものである。

しかし、子どもの個人差というものは、素質と環境のきわめて多くの原因が幅轆して形成されるものであるし、またその個人差もあ

る一時期のみから結論つけることは危険で、長い発達経過を縦断的に観察してみた上での個人差とその原因との関係を考察せねばならない。

このように考えてみると、「生れ月」という子どもの出生の時期的な要因がその成長発達に何らかの影響を与えるであろうことは考えられるが、それが子どもの知能やその他の能力に一对一の関係をもって直接的な影響力をもつとはいえないのではないか。

この点について、私は結論的なことは断言できない。現在の研究段階においては、いまだはっきりしたことはないからである。「早生れ」と「遅生れ」の問題についても、たしかに、一年近い誕生差のある子どもが、いっしょにグループ・ピングされて生活や学習をするのであるから、そのハンディが幼児期においてみられるのは当

然である。しかし、その差もはたして将来に大きな影響を及ぼすものであろうか。親が「損をしている」と深刻に思うほどのものであるか否かは疑問である。

これらの点を考察するために、私は二つの研究資料を紹介し、その範囲内でいいうることを述べてみたいと思う。

一、生れ月と知能との関係について

静岡大学心理学研究室が昭和三十三年から三十五年の三ケ年にわたって、静岡市内とその周辺部の小学校十二校の児童、約九千二百名を対象に、田中びね式個別知能検査を行ない、児童の知能の実態を調査すると共に、その児童の家庭環境、兄弟関係、出生順位、生れ月、親の職業と学歴、出生時の親の年齢などを調査し、それらと知能との関係を分析した（註一）。

これらの諸結果の中で、生れ月と知能指数との関係をみると、第一表のようになってゐる。これは、三ケ年間にわたって調査した児童の全体集計であつて、昭和三十六年に集計整理、三十七年に発表されたものである。したがつて昭和三十五年十月頃、一部のジャーナリズムにこの中間発表が注目され、非常に興味本位の取り上げられ方をし、我々研究室としても、その誤報ともいふべき発表のされ

第一表 生れ月別平均知能指数

I.Q.	児童数	平均 I.Q.	S.D.
生れ月			
4	730	103.9	13.7
5	598	105.4	12.6
6	639	105.1	14.7
7	678	105.3	14.6
8	701	104.6	14.1
9	670	105.1	15.4
10	734	105.7	14.9
11	668	105.1	14.9
12	634	107.8	13.7
1	938	106.5	15.0
2	748	106.9	16.7
3	711	107.8	16.5

全体平均 105.7 SD 14.9

方にたいへん迷惑を蒙つた次第であつたが、その折の結果は第二年度の結果で、三ケ年全体の集計とはやや異なつてゐるが大體の傾向は、三ケ年とも同じであつた。

さて、第一表の結果からどのような傾向が認められるであろうか。平均値の高い方から段階別に生れ月をまとめて分類してみると、高い段階に入るのが、十二月と三月、やや高い段階に入るのが、十月と一月と二月、普通の段階に入るのが、五月、六月、七月、九月、十一月、低い段階に入るのが八月、いちばん低いのが四月、と、いうことになる。

この結果をさらに季節的にみると、十二月、三月、一月、二月と、いった比較的寒い時期の方が、その他の時期にくらべて平均知能に

おいてやや高くなっていることがわかる。

けれども、最高の開きのある三月、十二月と、四月との平均値の差が、統計的には一%水準の有意差をもってはいるものの、知能指数でわずか三・九である。したがって生れ月別によって知能の平均水準にはある程度の高低の差があるとはいえるものの、その差は決定的なものとはいえない。

つきに私は三ヶ年の全児童の中から知的優秀児と考えられる知能指数一四〇以上のもの計一〇五名を抽出し、その児童の生れ月その他を調べて、普通児と比較してみた(註?)。その結果をみると、優秀児の生れ月の分布で比較的多いのは二月(一八・六%)、十月(一三・七%)、一月(一二・八%)、三月(一一・七%)であり、少ないのは六月(二・九%)、十一月(二・九%)、四月(三・九%)、五月(三・九%)となっている。

この結果は、優秀児数がきわめて少ないので一般的傾向と断言することはもちろんできないが、前述の平均知能の月別比較と対比してみると、やや共通の点が認められ、注目してよい点ではないかと思われる。

大伴茂氏が、関西において天才児一、〇一八名について調査された結果においても、三月(二五七名)、一月(二五〇名)、二月(一一九名)は多くなっており、七・八・九月は少ない結果が認められ

ている。

このようにみえてくると、生れ月、とくに一年間における出生の季節的な条件が、子どもの知能と何か関係があるように考えられるが、私はこれは、静岡市という一地域における、平均知能指数の統計の結果みられた一つの傾向であって、これだけから一般に生れ月と知能の高低に直接的因果関係があるとは断言できないと考えている。

もし強いて、出産の時期とI・Qとの間に何らかの関係があると思定するならば、受胎の季節的条件、胎児期の条件、さらには、乳児期の季節による発育条件などが、知的能力の基礎としての生理的・身体的発育と、何らかの関係があり間接的に影響をもつと考えられるのである。

われわれの研究結果では、知能の優劣とより深い関係のある要因としては、生れ月などよりも、(a)父母の学歴、(b)父の職業、(c)地域、などがはっきりした結果を示しており、次に(d)兄弟数、(e)出生順位、(f)子どもが生れた時の母の年齢、などがこれについて何らかの関係を明らかにしていた。

二、早生れ、遅生れと子どもの個人差

発達速度のきわめて顕著な幼児期において、二、三月生れの早生れの子とも、四、五月生れの遅生れの子ともとの間に、身体的、知的個人差のあることは当然であり、幼稚園や小学校低学年において、その差が認められることは、多くの人の指摘するところであるが、この差が、その発達の経過においてどのように変化するものであろうか。これについてある時期のみの横断的な比較研究はあるが、発達の長期にわたる縦断的な研究はきわめて少ない。

この点について、田中教育研究所の松原達哉氏が最近調査されたものが参考になるのでそれを紹介してみよう(註3)。

同氏は、昭和三十六年三月に小学校を卒業した六年生で、岐阜県、岩手県、秋田県の都市・農村の十二校、計一、一二〇名の学童の中から、両親健在、知能は普通、就学延期、重病、長欠などの特別異常のなかった児童の中から、二・三月生れの子(早生れ群)、九・十月生れの子(中間児群)、四・五月生れの子(遅生れ群)の三群を抽出し、その子どもたちの小学校一年生から六年生までの間の学力、体力、指導性、行動・性格などを綿密に調査し、三群の六ヶ年間における発達差を分析した。

この結果、大体次のことが判明した。

(a) 学力の比較。算数、国語、理科、社会などの知的教科は、同じ知能偏差値の子どもであっても大体二年生ごろまで遅生れ群の方

が成績がよい。しかし三年生ころにはほとんど有意差がなくなり、努力するもの、知能の高いものが成績はすぐれてくる。

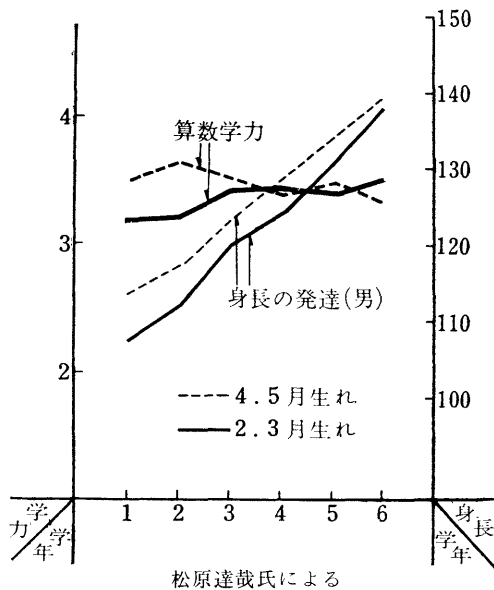
図工・音楽・体育などの教科は、六ヶ年間を通じて僅かの差をもって遅生れ群の方が成績がよい。とくに体育ははっきり有意差がある。

(b) 体力の比較。身長、体重、胸囲、座高などについては、高学年になるにつれて、両群の差は減少してくるが、男女ともに遅生れ群は六年間を通じて優れている。このことが、保健・体育の成績に大きく影響すると考えられる。欠席日数などを調べてみると、一年生のときは早生れ群は身体的未成熟で明らかに欠席が多いが、二年生からは両群に差はなくなってくる。以上の結果のうち、算数学力と身長発達の変化を図示すると、第一図のようになり、前述の傾向が明瞭である。

(c) 指導性の比較。学級委員の人数を比較すると、四年生までは、委員になるものに遅生れ群が多く、五年生からは両群に有意差はなくなる。このことは、低学年では体の大きい腕力のあるものがリーダーになる可能性が多いが、高学年になると外形的な条件でなくて、責任感、信頼性などの人格的特性や、知能、学力などがすぐれたものがリーダーの本質的特性をそなえたものとして委員になっている傾向を示している。

(d) 行動、性格の比較。担任教師の評価に基づいてこれを比較し

第一図 早生れ、遅生れの学力と身長の発達の比較



松原達哉氏による

たが、評価法が厳密でないので統計的検討は困難である。しかし傾向としては、指導性、根気強さ、情緒の安定、責任感、自主性などは、遅生れ群が六年間通じてやや優れ、協調性、活発性、明朗性、落ちつき、神経質などは、一年生から両群に差はみられなかった。

以上が、松原氏の調査結果の概要であるが、この結果からも明らかのように、低学年においては、早生れの子どもは、体力とくに体格において明瞭な差がみとめられるが、学力においては、三年生ごろにすでにそのハンディを取りもどし、体格においても、五、六年

生になると差は僅少なものになってくることがわかる。しかも、これは前の知能のはいと同様に、統計的な平均的傾向であるから、多くの例外は存在するものであって、素質や環境の如何によっては、早生れでも、はるかにすぐれた児童も多く認められるわけである。

静岡市内の某小学校において、一年生入級編成のさい、生れ月によって、早生れから順次、遅生れまで分けて六組を編成し、指導した結果、細かい資料は省略するが二年生の中頃から三年生のはじめにかけて、成績面での差は、どのクラス間においても全く認められなくなり、わずかに、体格と体力において多少の差が残存する程度であることが認められ、特別に学級編成をする意味が失なわれた結果、三年生になった時、全部組替えをしたケースがあった。

これらの点を考えると、小学校一年生などにおいて、特別に生れ月別にグルーピングするより、はじめからいっしょに編成して指導した方が、ある面では個人差を早く無くし、早生れの子どもたちも、より早くおいつくという面もあるのではないかと、思われる。もちろん、体力や体格面からくる差は教師が十分留意し、個人差にに応じた指導が必要であろうが、社会性や社会的な生活能力、自主性や指導性などの性格的特性などは、あまり年令差を意識し、カバーしないでむしろ全く同じように指導した方がよいように思われる。

知的能力、とくに学力の点では、平均すれば、松原氏の結果のよ

うに、早生れ群は一年生の頃多少の差は認められるが、実際には、精神年齢において、一年近い生活年齢の差をカバーしている子どもは多いし、それ以上の差をもって年上の子どもより進んだ精神年齢をもっている子どもも存在するわけであって、この知能が強い要因として働く学力の問題は、生れ月の差ということとあまり関係づけで考える必要はないのではないかと考えている。そして、ここで述べた、小学校一年生の問題は、多少の条件や程度の差はあろうが、幼稚園においても当てはまることと思う。

まとめ

以上のべたことは、二つの研究資料にもとづいた私見であるが、二つとも小学校を対象とした研究で、本誌の求められた幼稚園教育の直接的参考資料になりえないかも知れない。しかし、私は、小学校でいいうると同じ事が幼稚園のばあいもある程度あてはまると思う。

もちろん、小学校とことなつて、幼稚園時代における幼児の生れ月による発達差は、半年から一年近くも離れていると目立つものである。したがって、体格、体力、健康、基本的な生活能力など、明らかに成熟によって、より強く規定される面の個人差は十分考慮し、指導上もそれに応じた方法を取らなければならない。

しかし、性格的特徴や社会性、学習態度などは、生れ月によるより

は、むしろ家庭環境、兄弟関係、親のしつけ方法などにより決定的な影響力があることを十分考へるべきであつて、多少の遅れに必要以上に神経質になつたり、何でも『早生れ』に結びつけて被害妄想にならぬことこそ大切ではないかと思われる。

最初にも述べたように、子どもの能力や個人差は、長期にわたる発達の経過を通した長い目で見なければならぬ。幼児期における生れ月による個人差は、前述の研究においても明らかのように、児童後期頃までには十分とりもどせる性格のものである。したがつて、教師も親も、あまり現在における子どもの個人差——とくに他人との比較における遅れ——にのみ目を奪われず、子ども自身の将来に対する内的な力、伸びるべき芽を養うために、基礎的力としての体力、学習態度、社会性、自立・自主性などをより充実することに力をそそぐ必要がある。

(註1) 静岡大学心理学研究室 児童の知能の実態 静岡大学教育学部研究報告 第十二号 一九六一年 なおこの結果は昭和三十四年より三十六年にかけて日本応用心理学会において発表された。

(註2) 勝井晃 知的優秀児に関する実態調査——田中ビネー式による静岡市学童調査より——教育心理 九巻八号 一九六一年

(註3) 松原達哉 早生れと遅生れについての比較研究(一) 日本心理学会第二六回大会発表論文集 一九六二年

(静岡大学)